

平成 28 年度 第 1 回体罰を許さない学校づくり検討委員会要旨

- 1 日 時 平成 28 年 7 月 12 日 (火) 15:00~17:00
- 2 場 所 神戸市役所 1 号館 14 階 AV1 会議室
- 3 出席者 13 名 ※傍聴者 2 名
- 4 次 第
 - (1) 指導部長あいさつ
 - (2) 委員紹介
 - (3) 委員長あいさつ
 - (4) 事務局より「平成 27 年度の取組及び本市の状況」について
 - (5) 学校より 「体罰根絶に向けた取組」について
 - (6) 今後の研修等の方向性について
 - (7) 指導課長あいさつ

5 主な発言内容

<委員長あいさつ>

本委員会の目的としては、体罰の根絶を目指すことは当然であるが、現場の先生方の資質向上を図るため積極的な情報交換を進めることにある。学校に対する支援や組織作り、健全な教育を子供たちが享受できるような教育の在り方を議論し、より良い方向に推進していきたい。

<平成 27 年度の取組及び本市の状況について事務局から説明>

<学校現場より体罰根絶に向けた取組について報告>

- (小学校) 前年度の子供たちの様子について引き継ぎを受け、子供たちの背景を中心に児童理解を進めている。発達段階は一人一人個人差がある。また、発達障害のある児童について対応に配慮を要する場合がある。先生方は怒ると叱るとの違いを意識して指導にあたっている。
- (中学校) 子供たちの問題行動には、全職員で共通理解を図り、全職員で対応するということが、子供に何を伝えようとしているのかということを通理理解してから対応を進めている。「教える」から「コーチングする」「導く」という発想の転換が必要である。個人の資質について、怒りの沸点が違うが、沸点を統一化するために「メタ認知」の考えを実践に結び付けている。子供にも保護者にも教員の思いや、なぜそう対応したかがうまく伝わらないことが課題となっている。発達に課題のある子供たちへの専門的な立場からのアプローチをテーマにして研修を進めている。
- (高等学校) 基本的には生徒理解が前提にある。グループウェアという仕組みを使って子供たちの情報を共通理解している。生徒会活動において、部活動の顧問との顧問会議を開き、部活動の方針等を主体的に決定している。子供たちが自立していき、社会にしっかり目を向けていくことが課題であり、教員はそういった視点で教育を進める必要がある。生徒会の活動を効果的に生かしながら、工夫のある学校運営ができれば体罰も起こりにくいと考えます。
- (特別支援学校) 一番大事にしているのは子供たちの人権意識をどう高めるのかということである。もう一つは具体的な言葉かけである。子供たちの行為が意識的なのか、無意識なのかによって対応も変わるが、ゆっくり待つということが指導のポイントになる。子供たち一人一人の特性を理解してニーズを把握し、複数で指導することで、お互いがお互いを意識しながらきめ細やかな教育を展開している。
- 関係教員の状況について、各世代の構成人数の差があるのに、発生している割合がほぼ同じであるのはなぜか？
- 事 神戸市の教職員全体での割合ではなく、事案が発生した中での割合であると考えていただきたい。40 代 50 代のいわゆるベテランの教員については自分の経験した指導が通らないという子供たちの変化に戸惑いをみせているという現状がある。
- 児童生徒理解が基本となる。子供たちが家庭の背景をベースとして先生の言動に反応するというメカニズムを理解した時に、先生方の子供たちに対する見方がかわる。新たな課題としては、発達障害のある子供たちへの対応である。最初の言葉かけにより子供たちの反応はずいぶん違う。

そういう事例を指導に生かしていくべきである。

- 体罰が発生する要因は、本当に未熟さやとまどいからきているのか疑問に感じる。発達障害のある子供たちへの対応について、どの程度現場ですすんでいるのか、教えていただきたい。
- 教員の経験年数によるものではなく、事案に対する対応力の差が原因となっているのかもしれない。発達障害のある子供への対応については、ここ数年、指導法が研修等の機会を通じて広まりつつある。スクールカウンセラーが配置され、専門的な立場からの助言や専門機関へのつなぎ等を示唆していただくなど、現場では大変有効である。
- 子供や保護者が「体罰」という言葉で先生方を責める可能性も十分考えられる。先生方の理念を保護者に対してきちんと説明ができることが大切だと思う。体罰事案はきちんと公表し、保護者も共有して同一歩調で協力していかなければならないと思っている。
- 学校の中ではいろいろな事案が起こっており、対応について校長先生と相談したことがある。子供の発する言葉は親子の会話の中で身に付いたことも多く、親の指導は重要である。
- 何気ない言葉でのやり取りで傷つくことも多いのではないかと思う。我々が子供のころの指導とは大きく違っている。社会人になった時のことも踏まえた教育へどう結び付けていくのが課題である。
- 学校の中で子供に発達障害の傾向を感じた時に、それをどう保護者に伝えるのか難しいと思う。
- 傾聴と受容と共感是指導のベースにあると感じている。発達障害のことについてはかなり認知されてきているが、衝動的な動きをする子供たちは二次障害的な要素が含まれている場合があり、具体的にどう対応するかについては課題が残る。先生方がその前兆に気づくこと、また、回復を見せた後に適切な声をかけることが必要である。本検討委員会で作成したリーフレットの中にも有効な手立てが掲載されており、先生方の研修のための資料であると同時に、子供たちにも生かす資料であればと考える。

<今後の研修等の方向性について>

スポーツ体育課より【指導者のあり方・神戸市立外部指導員講習会資料について】

人権教育課より【人権研修資料について】

- 先生と子供の関係が大きく変わってきている。先生と子供の一对一の関係づくりが昔のままでいいのかという課題がある。
- 勝利至上主義をなくすことは本当にいいのかと思う。そこに先生の熱意、あるいは指導力が問われているのであり、子供たちが先生の指導を受けて頑張ろうと思うかがポイントではないか。義務教育の中では、どうやって共同で生活をするのかを学ぶことが大事で、我慢して努力することが大切である。できなくて当たり前というような指導が当然とならないように願う。
- 自分を向上させる、自分を乗り越えるために勝つことを目指すのは決して悪いことではない。そのことと勝利至上主義は違う。一番の問題は、勝利至上主義がなぜいけないのか、指導する当事者間で本当の意味に立ち入って意識を共有できていないところに問題があると思う。

<委員長まとめ>

神戸市は国際都市として成長してきた。つまり外に開かれている。いろんな意見を聞く。過去の教訓から、時代の流れから、海外から良いところを吸収していく。そして神戸から子供のためにより良い教育を発信する。そういうことが神戸にはできるのではないかと思う。今後ますます神戸の子供たちが健全に成長するように願う。

6 事務連絡

7 閉会あいさつ